

社会に生きる学力形成をめざしたカリキュラム・イノベーション
2013年12月8日 東京大学福武ホール ラーニングシアター

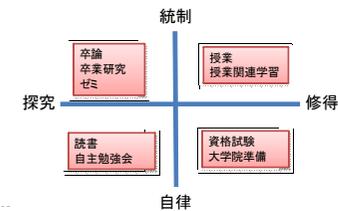
コメント：高大接続の視点から

両角亜希子（大学経営・政策コース）

1

全体的な感想

- ▶ 実践に基づいた、各教ステージにあった形での具体的なカリキュラム提案→非常に興味深い
- ▶ 中等教育と高等教育の垣根が非常に低くなる提案
 - ▶ かつて：高校までは既存の知識を学ぶ→大学では既存の知識を疑ってみる。大きな断絶。→大学での初年次教育
 - ▶ 修得(知識&考え方)と探究の両方をもつ高等教育
 - ▶ 高等教育側も変化
- ▶ 「高等普通教育」「学校化」
- ▶ 社会の変化の影響を共通に受けている面
- ▶ 非常に近い実践が模索



▶ 2

(参考) ハーバードの前学長の教育改善提案

- ▶ Our Underachieving Colleges(2005年)、Bok学長の著書
- ▶ 学士課程教育の8つの目標と現状・改善の必要性
 - ▶ ① コミュニケーション能力(Learning to Communicate)
 - ▶ ② クリティカルシンキング(Learning to Think)
 - ▶ ③ 人格形成(Building Character)
 - ▶ ④ 市民生活の準備(Preparation for Citizenship)
 - ▶ ⑤ 多様性との共存(Living with Diversity)
 - ▶ ⑥ グローバル社会への対応(Preparing for a Global Society)
 - ▶ ⑦ 幅広い興味の獲得(Acquiring Broader Interests)
 - ▶ ⑧ 職業キャリアへの準備(Preparing for a Career)



▶ 3

論点①：新カリキュラムが教員に与える影響

- ▶ 非常に魅力的だが、新たな挑戦も含むカリキュラム
 - ▶ メタ学習、生き方学習、社会参加の学習をいずれも総合的学習の時間で学ぶと同時に、各教科の中にもそうした要素を取り込む
 - ▶ クロスカリキュラムの提案(数学と理科、国語と英語等)
- ▶ 多忙を極めている学校の先生たちに対して、新たな知識や技能はどの程度、求められるものなのか。
 - ▶ 各ユニットでの実践からのコメント
 - ▶ 参加された附属の先生方からのコメント
- ▶ 教員の技能の差は出てこないのか。
 - ▶ たとえば、大学の初年次教育で、共通の目的をもった探究学習(初年次ゼミ)が多く大学の大学で実践されているが、共通テキストやFDをしたところで、教員による差が大きいという学生の不満は大きい。

▶ 4

基本的に「増やす」提案がなされるが、教員数を増やせないのであれば、何らかを減らす必要性はないのか／可能なのか。

- ▶ 大学側の高校への不満
 - ▶ 「高校の到達度の低下」
 - ▶ 「高校の内申点の信頼度の低下」
 - ▶ 「高校での未履修問題」

▶ 5

論点②：生徒のタイプで有効性に違いはあるか

- ▶ 授業方法や内容の工夫について、少なくとも大学生では、偏差値や学生の志向性によって、効果が異なることが分かっている。(例：次のスライド)
- ▶ 生徒の学力レベル、キャリアビジョンの明確さ、あるいは高校制の場合は文系・理系といった違いによって、向き・不向きといったことはないのか。

▶ 6

大学生：学生のタイプで効果的な授業が異なる

	「卒業後にやりたいことは決まっている」				
	Yes (明確)		No (不明確)		
	「大学での授業はやりたいことと密接に関わっている」		「授業を通じてやりたいことを見つけた」		
	Yes (関係している)	No (関係していない)	Yes (期待している)	No (期待していない)	
	高同調型	独立型	受容型	疎外型	
		高同調	独立	受容	疎外
影響を受けた授業の特徴					
学問の基礎を教えてくれた			●●		
学問の最先端を披露してくれた		●			
学問と社会の関わりを示してくれた				●●●	
理解しやすく、興味わくよう工夫			●●	●●●	
参加を求められた			●●	●●●	
課題等で到達状況を頻りにチェック		××			●
将来につながる知識・技能を教わった			●		
資格取得に役立った					
将来の仕事・生き方のきっかけを貰った	●●●				

▶ 7

両角亜希子「学生類型をベースに考える楽しい授業スタイル」清水亮・橋本勝編「学生と楽しむ大学教育」ナカニシヤ出版、2013年12月、105-119頁

論点③：
こうした新しい学習成果を大学入試で問うべきか

- ▶ 政府の教育再生実行会議の提言
 - ▶ 学力以外の能力、意欲、適性なども評価すべき。
 - ▶ 高校在学中に受ける「基礎レベル」を新たに創設し、現在の大学入試センター試験を「発展レベル」として衣替え。基礎レベルの試験は推薦入試やAO入試で活用し、発展レベルは「一点刻み」をさけ、複数回受験できるようにする。
- ▶ 大学側の意見は、賛否が分かれている。
 - ▶ こうした提案を望ましいと考えるのか、また現実問題として可能なのか、またそもそも高大接続や大学入試の何が問題なのか、という認識等において。
 - ▶ 現実の大学入試はすでにかなり多様化・複雑化・入試関連業務の増加が起きている。
 - ▶ リクルート『カレッジマネジメント』2014年1月号参照

▶ 8

論点④：進路指導から「生き方」学習へ

- ▶ 一部だが、いきすぎた進路指導・キャリア教育
 - ▶ 一部の高校の進路指導で、具体的な職業イメージを持たせて、入れる学部に入学させ、入学後の不適應が問題になっている大学が多い。軌道修正がしにくい学部・大学を選んだ場合は、生徒・学生にとって大きな悲劇。(大学の就職指導でも同じような問題は起きているが...)
 - ▶ その原因の一端は、大学入試において、細かな学部・学科単位で募集をして(無理やり選ばせる)、志願者増をねらい、毎年のように、入試改革をやりつづける大学側にもある。
 - ▶ 実際に、高校の先生はとても情報や理解が追いつかずに、進路相談のコンサル等をいれている状況があるという。
 - ▶ 高大が協力して、改善すべき観点で、「生き方の学習ユニット」の提案、非常に参考になる。

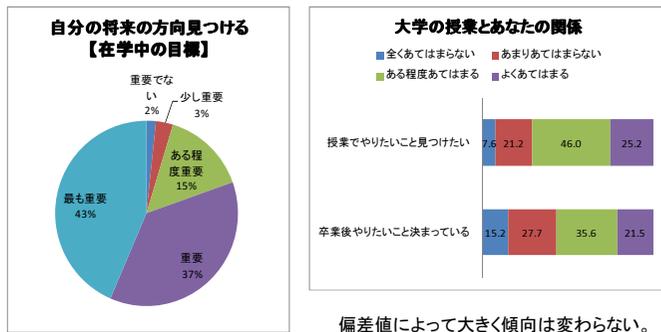
▶ 9

柔軟性ある進路・キャリアの明確化の効果

- ▶ 大学生の進路・キャリアの確定度合い
- ▶ スライド11:
 - ▶ 現実のデータをみると、大学1年生で、将来が確定していない学生がマジョリティである。
- ▶ スライド12、13:
 - ▶ 重要なのは、獲得>継続の関係。継続(大学にやりたいことがあって入学しても、大学教育で何らかのインパクトを受けなかった学生)よりも、獲得(大学入学時にやりたいことはなかったが、大学自体に何らかを得たと実感できた学生)の方が、獲得した能力、職業生活での満足度が高い。
 - ▶ どこかの時点で、無理やりに具体的な職業希望を選ばせるのではなく、それぞれの時点で模索し、一定の選択をしつつ、努力する柔軟な姿勢が重要なのではないか。

▶ 10

大学1年生の大学生活の目標

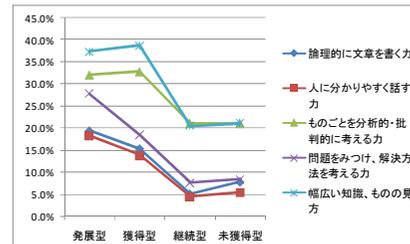


東京大学大学経営・政策研究センター「全国大学生調査」より作成
<http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/>

▶ 11

キャリア意識×在学中の能力の伸び

		卒業後に進みたい方向が段々と固まってきた	
		よく+ある程度あてはまる	あまり+全くあてはまらない
大学入学時点で、卒業後にやりたいことは決まっていた	よく+ある程度あてはまる	発展 (41.5%)	継続 (12.8%)
	あまり+全くあてはまらない	獲得 (32.0%)	未獲得 (13.6%)



▶ 12

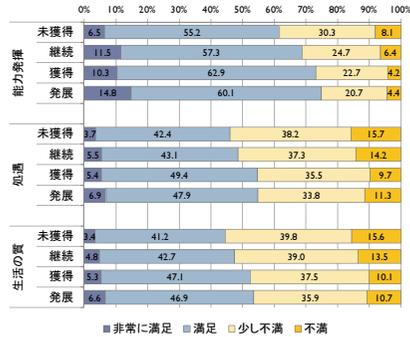
キャリア意識と仕事満足度

仕事への満足度

「現在のお仕事について、以下の点でどのように評価しますか。」

(「不満」=1～「非常に満足」=4)

- 自分の能力を生かすうえで
- 処遇のうえで
- 生活の質のうえで



- ▶ 獲得型と発展型の満足度が高い
- ▶ 結果は省略するが、学歴や分野、処遇、仕事内容などを統制しても影響は残る。

▶ 13

※「大卒職業人調査」(N=25203)より作成

論点⑤：新カリキュラムは、大学にどのような変化を求めるのか

- ▶ すでに高校段階で主体的な学習に力を入れている学校も増えているが(総合学科等)、大学側は意外とそうした動きを十分に把握していない。
- ▶ そうした高校の話を知ると、大学へのスムーズな移行というより、「大学の初年次教育で同じようなことをまたやらされる」といった声もある。
- ▶ また、社会参加の学習など、現在、大学でも同様のことが課題となり、実践されている内容も多く、よい形で連携・協力することで効果が高められる可能性も感じた。
- ▶ もし、新カリキュラムが実現した場合、大学をはじめ、高等教育機関がどのように変わることによりよい接続が生まれるのか、もしご意見や要望があれば、最後に教えていただきたい。

▶ 14